

芥川龍之介『おぎん』論

——おぎんの棄教の果てに、「作者」は何を見たか——

奥田雅則

一、

芥川龍之介の短編小説『おぎん』は、大正十一年九月に「中央公論」に発表され、後に『黄雀風』（大正十三年七月）などに収められた。この小説は芥川龍之介文芸における、いわゆる切支丹ものに属する作品であるが、後にキリスト教へと深い関心を寄せてゆく芥川龍之介その人を窺ううえでも非常に重要な位置を占める作品であろう。

『おぎん』という小説に関して、佐藤泰正氏は『おぎん』を「この系列（切支丹もの…引用者註）中第一等の作、尠くとも彼の最も重い主題になった、注目すべき作」として高く評価しながら、「殉教と棄教、さらには宗教の土俗化の問題をめぐって、最も重く深い問いを投げかけている」とし、さらには、

異端の宗教に殉じた死者を（また生者をも）切り棄てずしては成就されぬものならば、この信仰とは、殉教とは何か。あの「墓原の松のかげ」に眠り、「いんへるの」に堕ちたと信ぜられる両親を捨ててゆくことは出来ぬというおぎんの告白は、この

避けがたく重い問いを我々に突きつける。(1)

として、東洋対西洋という構図のみではない、真なる信仰の獲得という点においての、日本人にとってのキリスト教ということにまで問題は及んで見ている。また、関口安義氏は、『おぎん』に関して、

ここには日本人的肉親の情が、切支丹信仰の妨げとなったことが描かれている。キリスト教信仰に限らず、日本人はヨーロッパの合理精神を取り入れてもなかなかなじみえず、最後にはそれを捨て、親子や肉親の情に走るといことが多い。(2)

と述べている。これまでの研究において『おぎん』という小説は、日本という土地においてのキリスト教の問題が提起された作品であると見做されてきたようである。

さて、そのようにして日本という土地におけるキリスト教受容という問題を思うとき、注目されるのは作品末尾に突如現れる「作者」という存在であろう。

更に又伝ふる所によれば、悪魔はその時大歓喜のあまり、大きい書物に化けながら、夜中刑場に飛んでいたと云ふ。これもさう無性に喜ぶ程、悪魔の成功だつたかどうか、作者は甚だ懐疑的である。

ここで「これもさう無性に喜ぶほど、悪魔の成功だつたかどうか、作者は甚だ懐疑的である。」として、おぎんの棄教の意味を問う「作者」とは、「見物の老若男女」や、さらには「大歓喜のあまり、大きい書物に化けながら、夜中刑場に飛んでいた」という「悪魔」に疑問を投げかけ、この棄教劇のさらに先にある問題を見据えている存在として見做し得るからである。

この「作者」という存在については、実は最新の『おぎん』研究でも注目されたところであった。早澤正人氏は、『おぎん』一篇には「①同時代人の認識」「②切支丹の認識」「③現代の「作者」の認識」という「位相の異なる複数の認識が、物語の地層に潜在している」ことに着目しているが、ただし氏は、その複数の認識の介在を、「自動化された制度的思考に基づいた」「同時代人の認識」と「切支丹の認識」を「現代の「作者」の認識」は「かかる制度的思考に対して批判的なスタンスを取っている。」として、「おぎん」は制度をめぐる物語なのである。」と結論付けている⁽³⁾。

しかしながら、ここでの「作者」がおぎんたちの棄教劇を語ることによって、真に問わんとしているものとは、そのような制度的思考というような段階のもののみであったであろうか。前述したところではあるが、このテキストの書き手として登場する「作者」とは明らかに、そのような同時代的背景に留まらず、キリスト教という宗教の、その本質までもを見据えようとしているはずである。よってここに、「作者」という存在が浮上させる問題とは何であったか、考察してゆきたい。

一一、

「作者」という存在の持つ意味を考察する前に、ここではまずその前提として、この小説が問うている問題の在り処を確認しておく。

おぎんたちの棄教劇を窺ううえでまず確認しておかなければならぬことは、おぎんたちのキリスト教信仰の保持を阻むもの、その正体であろう。それは、例えば河村清一郎氏が、「ここに、家族制度下における日本人の、基本的な人間関係が見られる。」⁽⁴⁾と述べているように、或いは曹紗玉氏が

「親孝行」という、封建的とも言える日本の土着の論理によつて棄教者となることが、キリスト教的に言えば、「流人となるるえわの子供」として裁かれるはずのものではあるが、「あらゆる人間の心」としての肉親の情愛による裏切りであることによつて、赦されるのか赦されないのかを芥川は自分の問題として問うているのである。

として、「ここには、日本においてキリスト教の浸透を妨げる日本の精神風土の問題が提起されている」⁽⁵⁾と指摘しているとおおり、おぎんたちの信仰を阻むもの、それはおぎんたちが避けがたく背負っている日本の精神であるということである。『おぎん』という小説にあつては、この日本の精神が、キリスト教信仰ということに相對せられている。言わば、この小説が根幹として問わんとするものは、日本という土地においての、或いは日本人にとつてのキリスト教信仰とは如何なるものかという点なのである。

さて、そのようなことを踏まえ『おぎん』という小説を注目するとき、この小説では、キリスト教信仰ということにおいて、信仰者と非信仰者との書き分けが、「無知」というと一点で切り離されているという事実気付かされる。

おぎんの父母は大阪から、はるばる長崎へ流浪して来た。が、何もし出さない内に、おぎん一人を残した儘、二人とも故人になつてしまつた。勿論彼等他国ものは、天主のおん教を知る筈はない。

*

しかしおぎんの母親は、前にもちよいと書いた通り、さう云ふ真実を知る筈はない。彼等は息を引きとつた後も、釈迦の教を信じてゐる。寂しい墓原の松のかげに、末は「いんへるの」に墮ちるもの知らず、はかない極楽を夢見てゐる。

例えば右に挙げたような二箇所がそうであるが、おぎんたちがキリスト教を「信じている」のに対して、小説における非信者は、一貫してキリスト教を「信じていない」というのではなく、「知らない」というようにして書かれている。そしてこの事実に対応するかのように、おぎんの場合には、「しかしおぎんは幸ひにも、両親の無知に染まつてゐない」とされているのである。即ち、『おぎん』という小説におけるキリスト教信者と非信者は、それを「知っている」かどうかという、非常に際どい一点において隔たつてゐるのである。

福井靖子氏は『おぎん』という小説の主題に関して、宣教師フランシスコ・ザビエルの書簡集との整合の中から、

日本人の神観念、その人生観、神への愛と肉親への愛情との葛藤、家族制度からくる制約など、幾つかの事項が挙げられるのであろうが、何といつても、その根底に横たわつてゐるのは、非キリスト者の救ひの問題であるといえるであらう。キリスト教を信じなかつた、あるいは全く知らなかつた人々は果たして救われるのか。⁽⁶⁾

という問題を読み取つてゐるのであるが、確かに『おぎん』一篇が暴く問題とは、ここで指摘されるように、おぎんが訴える非キリスト教信者たる両親への「申し訳なさ」という、非キリスト教者の救ひの如何であつたということが確かであらう。だがしかし、そのような指摘の裏返しであるかのように、信者と非信者の非常に際どい一点においての切り分けを思えば、ここで暴かれる問題とは、非キリスト教信者のみならず、当然おぎんたちキリスト教信者にも及んでゐるのだと見做すべきであらう。

その証左として、小説においての語り手の「無知」ということに関しての筆致に着目すれば、「はかない極楽」というような非キリスト教信者への書き振りに明らかなように、また、「幸ひにも、両親の無知に染まつてゐない」というキリスト教信者おぎんへの書き振りに明らかなように、語り手はおぎんの側に、即ちキリスト教信者の側

に寄っているのだと見做し得る。

つまり、このような事実には、先に見たような日本という土地においてのキリスト教受容の問題を重ねて考えるとき、そこには勿論おぎんの両親のような非信仰者の救いの如何という重い問題が存在しながら、同時にまた、「無知」ではない者のキリスト教信仰保持の重み、即ち日本の精神という何よりも脱しがたい背景を背負いながらにして、それでもひとたびキリスト教という宗教に触れ、それに「無知」ではおれないでいる日本人の、そのキリスト教信仰保持の困難さという問題が浮き彫りにされているのである。

代官は天主のおん教は勿論、釈迦の教も知らなかつたから、なぜ彼等が剛情を張るのかさっぱり理解が出来なかつた。時には三人が三人とも、氣違ひではないかと思ふ事もあつた。

例えば右に挙げたようなおぎんたちを処する代官の思考に関しても、その非常に単純化されたそれを支えているものとはただ「知らなかつた」という一点であり、それ即ち、ここには信仰を知るが故の苦悩は全く存在していないのであり、このような代官の「無知」ゆえの思考は、おぎんたち信仰者の苦悩を見事に照射することとなつていよう。

つまり『おぎん』という小説が暴いているものとは、おぎんの両親のようなキリスト教という宗教において全く「無知」であつたという非信仰者の救いの在り処という問題であるということとは勿論のこと、同時にまた、ひとたびキリスト教という信仰に触れ、もはやそれに「無知」ではおれない人間の存在の如何というところまで問題は及んでいるのだと言えよう。

さて、ここでまた『おぎん』における「作者」という存在に目を向けるとき、まず注目すべきはこの「作者」が拠って立っている位置ということであろう。

元和か、寛永か、兎に角遠い昔である。

天主のおん教を奉ずるものは、その頃でももう見つかり次第、火炙りや磔に遇はされてゐた。しかし迫害が烈しいだけに、「万事にかなひ給ふおん主」も、その頃は一層この国の宗徒に、あらたかな御加護を加へられたらしい。(中略)――

その元和か、寛永か、兎に角遠い昔である。

それ即ち、ここでの小説冒頭部において繰り返し語られるような、小説の舞台を「元和か、寛永か」としてはつきりとさせないながらも「兎に角遠い昔」だとしているという点である。

このような書き振りの示しているものは、言うまでもなくこの「作者」が現在に、つまりは小説執筆時現在に立っているということであろう。小説には明らかに、現在と過去という時間軸が意識されている。ここでの「作者」とは、明らかに『おぎん』一篇の小説世界を過去として捉えているのであり、それ即ち、「作者」という存在の登場とその見解の挿入とは、小説執筆時現在という、近代という時代からの逆照射に他ならない。

加えて、ここに見て置きたい事実がある。前章で触れた『神神の微笑』の末尾の場面において芥川は、次のように語っていた。

泥烏須が勝つか、大日が勝つか——それはまだ現在でも、容易に断定は出来ないかも知れない。が、やがては我々の事業が、断定を与うべき問題である。君はその過去の海辺から、静かに我々を見てい給え。たとい君は同じ屏風の、犬を曳いた甲比丹や、日傘をさしかけた黒ん坊の子供と、忘却の眠に沈んでいても、新たに水平へ現れた、我々の黒船の石火矢の音は、必ず古めかしい君等の夢を破る時があるに違いない。

ここでの箇所に端的であるように、『神神の微笑』でも明らかに過去と現在という時間軸が、新しいものと古いもの、すなわち新旧という問題を交えた形で意識されていた。それを芥川は「我我」という存在の提出によって、「泥烏須が勝つか、大日が勝つか」という問題をいま一度現在へと引き戻して問うたわけであるが、このような意識は『おぎん』においても通底しているようにことが推測されるのである。『神神の微笑』の「我我」と『おぎん』の「作者」という両者は、明らかに同じものを凝視しようとしているのであり、またそのようにしてみれば、『おぎん』という小説においての「作者」の介入もまた、おぎんたちの棄教劇の孕んでいる問題、その内実を、過去の歴史の中から掬い取り、そして現在という地平へと引き戻したうえで問い直すという試みでもあったであろう。

さらに、『神神の微笑』において先のような試みを行った芥川の問題意識が、さらに『おぎん』一篇にまで引き継がれていると認めるとするならば、またその時代を「とにかく遠い昔」だとする語り口の共通点を重要視するならば、『おぎん』においての「寛永か、元和か」という舞台もまた、「作者」の地平から眺められたときには、それは「古めかしい」時代であったのだということになる。それ即ち、この「作者」という地平からの逆照射の示すところとは、「作者」がいま眼差しているおぎんたちの棄教劇が、「過去」の「古めかしい」ものとして、ある種の旧時代的限界として据えられているのだということであろう。そして「作者」がここでおぎんたちの棄教劇を語るその意味とは、まさしくこのような旧時代的限界を踏み越えんとすることではなかったか。

述べたように、小説においての信仰者と非信仰者は「無知」かどうかという一点で分かれたれていた。してみれば、『おぎん』一篇における棄教劇のおおよそ三世紀後という、「作者」が生きる「過去」ではない時代、『神神の微笑』末尾の「黒船」が象徴的に語ったように、もはやキリスト教という宗教を「知らない」というのではない開かれた地平からの照射は、日本の精神を有しながらにしてキリスト教に触れんとするこれからの日本人の、その可能性をも映し出すこととなっているのである。先に少し確認されたように、小説における語り手の書き振りから見ると、ここでの語り手はおぎんたち信仰者の側に寄っているかに見える。このこととはまさに、「作者」がもはやキリスト教という宗教に対して「無知」ではないということを示すものであろうし、それ故におぎんたちの棄教劇は「作者」にとってもまた消化せねばならぬ命題として現前した筈である。

つまり、『おぎん』においての「作者」の介入とその在り様とは、前章で述べた東洋的精神という免れがたい背景を有しながらにしてキリスト教という宗教を選び取った人間の在り方という問題を、この「作者」を含めたうえで、これから生きる日本人のキリスト教受容というところにまで及んで深い問いを投げ掛けんとする、そのような役割を果たすものとして認められるのである。

四、

以上を踏まえて、表題に掲げたとおり、「これもさう無性に喜ぶ程、悪魔の成功だったかどうか、作者は甚だ懐疑的である。」と語る「作者」は、おぎんの棄教の果てに何を見ようとしているのかということについて結論を付けたい。

（こ）こまでで見たように、『おぎん』という小説が暴く問題が、キリスト教とは相容れぬ日本の精神という何よりも

脱しがたい背景を有しながらにしてキリスト教という信仰を選び取った日本人の在り方の如何という点にあるのであるとするならば、そしてそれを「作者」の介入によって、これからの日本人のキリスト教受容の可能性をも問おうとしているのだとするならば、問題となることは、森本平氏が、おぎんたちの棄教に関して、

もうひとつ大事なことは、おぎんが（中略）「いんへるの」に行くであろうことを最後まで信じていることである。確かにおぎん達は、ドグマとしてのキリスト教、行為を伴った形式としての宗教は棄てた。しかし彼らはキリスト教の説いていることが正しいという考え、言うなれば心の内側の信仰は棄てていない。(7)

と述べているように、おぎんたちが真にキリスト教の教えを棄てているのかどうか、ということであろう。

「わたしはおん教を捨てました。その訣はふと向うに見える、天蓋のやうな松の梢に、気のついたせゐでございます。あの墓原の松のかけに、眠つていらつしやる御両親は、天主のおん教も御存知なし、きつと今頃はいんへるのに、お堕ちになつていらつしやいませう。それを今わたし一人、はらいその門にはいつたのでは、どうしても申し訣がありません。(後略)」（傍線ママ）

信仰を棄てるその理由について、おぎんは右の引用箇所のように語るのであるが、ここにあるようにおぎんが信仰を棄てるのは、両親に「申し訣がないから」というものである。おぎんが両親に「申し訣なさ」を感じるといふ事実はまさしく、自分だけが救われ両親が救われないということを、それ即ち、彼女が天国と地獄というキリスト教の教理を疑っているわけではないということを証していよう。

そして悪魔はこのおぎんの棄教に対して「大歓喜」するわけだが、「作者」はここで「悪魔の成功だつたかどうか」

を問うのである。即ち、「作者」の「懐疑」とは、悪魔のかたちだけの棄教を喜ぶ悪魔の在り様に対して向けられているのであり、ここに「作者」のおぎんたちの揺るぎない信仰への、さらに言えばキリスト教信仰への確信とでも言うべきものが読み取り得るであろう。先に確認されたような、キリスト教信者に寄り添わんとする語り手のスタンスも、これを裏打ちしている。

だがしかし、さらに言うなれば、信仰を棄てんとしている今まさにここで、おぎんが見ているのは、神ではなく「墓原の松のかげ」であり、即ち、両親なのであるということも重要である。つまり、おぎんの信仰を阻んでいるものとは、先に見たように、神への疑心や不信ではなく、救われぬ両親への申し訳なさという、彼女が如何ともし難く背負っている日本の精神という背景と、信仰の保持との間に横たわる相剋ともいうべきものである。確かにおぎんは「おん教を捨てた上は、わたしも生きては居られません。」と語るように、彼女にとつてそれは苦渋に満ちた心からの決断であつただろう。だがそれも、決して神を裏切つてはいないという点において、おぎんの棄教とは、真の意味において棄教とは言い得ないのである。

そしてそのようにして見るならば、「作者」が「懐疑的」だという問い掛けは、まさにこのおぎんの神不在とも言ふべき棄教にまでも及んだものではなかったか。三好行雄は、『おぎん』に関して、

信仰よりも人間を選んだ背徳の徒に、龍之介は「流人となるえわの子供」、あらゆる人間の心を見ている。かれらは天上へ登りつめる殉教者の光栄に代えて、あまりにも地上的な肉親の恩愛に執しつづけたのだが、「奉教人の死」の作家はいま、あえてそれを良しとした。⁽⁸⁾

と述べたが、ここで「作者」はおぎんたちの棄教を「あえてよしと」しているというのではなく、むしろおぎんの神

不在の棄教が果たして真に棄教であるのかどうかをも、同時に問い直しているのだということであろう。即ち、『おぎん』という小説においては、代官や見物人といった存在は言うまでもなく、キリスト教という宗教を選び取ったおぎんたち信仰者も、またそれを阻まんとする悪魔でさえも、誰一人として本来の意味合いにおいて、キリスト教信仰の本質を見据え得たものはいないということである。この小説においての棄教劇では、そのようなキリスト教の本質如何という問題は、もはや置き去りにされていると言えよう。

先に見たように、「作者」はおぎんたちの棄教劇を「遠い昔」だとして、キリスト教信仰という点での旧時代的限界として措定していたが、その限界とは、まさしくこのようなキリスト教信仰の本質が置き去りにされた棄教劇の在り様そのものであった筈である。そして「作者」はいま、この真なるキリスト教が眼差されぬ棄教劇を、現在の地平から問い直す。「作者」が「懐疑的」だとそこに疑問を投げかけるいま、その問いは、近代という時代に至りもはや真の意味でのキリスト教に「無知」ではない時代を生きる者のキリスト教信仰の在り様へとそのまま投げ返される。そのような意味で、小説におけるおぎんの棄教劇の果てに「作者」が見据えていたものとは、おぎんたちと同じくして東洋的精神という背景を背負いながらにして近代というキリスト教に「無知」ならざる時代を生きるこれからの日本人の、その信仰のあるべき姿ではなかったか。言い換えれば、これからの日本人にとって、真の意味でのキリスト教理解の、その可能性である。小説において「作者」は、おぎんたちを殉教か脱し得ぬ精神的背景かという一種の宗教的アポリアへの前へと佇立させることによって、キリスト教という信仰を選び取った日本人の在り方を探らんとした。それは東洋的精神を背負った日本人にとって真なるキリスト教とは存在し得ぬのか、という問いにもなるが、それをいま「新しい」地平から担い直す「作者」という存在を考えると、キリスト教という宗教を見据え、その本当の意味での可能性を模索せんとする「作者」の眼差しが認められるのである。そしてこれは同時に、後にキリスト

教へと接近してゆく芥川龍之介その人でもあるということは、付言するまでもなからう。

以上のようなことから『おぎん』という小説は、過去のおぎんたちの棄教劇を通して東洋的精神を背負った日本人にとつてのキリスト教信仰の可能性を問うた作品であると同時に、「作者」という存在の挿入によつて、これからの日本人にとつての真の意味においてのキリスト教受容という点においての課題までもが見据えられた作品として評価できるのである。

- 註(1) 佐藤泰正「奉教人の死」と「おぎん」芥川切支丹物に関する一考察（『佐藤泰正著作集4 芥川龍之介論』（平成十二年九月 翰林書房）収）四四～四六頁
- (2) 関口安義『この人を見よ 芥川龍之介と聖書』（平成七年七月 小沢書店）一四四頁
- (3) 早澤正人『おぎん——〈他力〉へ』（宮坂覺編『芥川龍之介と切支丹物——多声・交差・越境』（平成二十六年四月 翰林書房）収）二九九～三〇一頁
- (4) 河村清一郎『「神神の微笑」「おぎん」「おしの」など——芥川龍之介の切支丹物について』（昭和三十五年十二月「金城国文」）七頁
- (5) 青紗玉『芥川龍之介とキリスト教』（平成七年三月 翰林書房）一八五～一八六頁
- (6) 福井靖子『芥川龍之介「おぎん」をめぐる』（昭和五十五年十二月「白百合女子大学研究紀要」）五四頁
- (7) 森本平『芥川龍之介の転換期における人間愛——「おぎん」を中心に——』（平成元年三月「國學院大学大学院文學研究科論集」）一三頁
- (8) 三好行雄『「地底に潜むもの」「南京の基督」前後』（『三好行雄著作集第三卷 芥川龍之介論』（平成五年三月 筑摩書房）収）一八五頁

（おくだ まさのり・関西学院大学大学院文学研究科研究員）